

四子王旗より北京に陳情・権利擁護に赴いた牧民の離京声明

2009年、朱日和（ジュリヘ）軍事基地が四子王旗および蘇尼特右旗の草原に建設されて以来、牧民たちの生活は根底から覆されました。

故郷を離れざるを得なかった牧民たちは、長く受け継がれてきた遊牧生活に別れを告げただけでなく、転換後に生じたさまざまな文化的衝突と苦痛にも直面しています。さらに悲しいことに、移転を強いられた牧民に対して約束された補償はいまだに履行されていません。最下層の牧民たちは、血を流したうえに、今なお涙を流し続けています。

朱日和軍事基地は1066平方キロメートルの土地を占有し、823戸・2907人の牧民が移転の対象となりました。補償金の総額は18億元とされていますが、実際に牧民の手元に届いた金額には大きな不足があります。私たちは、政府に対し補償金の会計を公開し、その行方を説明するよう求めてきました。しかし、このごく基本的な要求に対して、いまだ何の回答も得られていません。このため、私たちはすでに5年間にわたり、陳情と権利擁護を続けてきました。

今回、私たちは再び北京に上京し陳情を行いました。2015年1月12日から本日に至るまで、8つの部門を訪問し、資料を提出しましたが、そのうち5つの部門からは冷淡な対応を受けました。中には、提出した資料を受け取らないばかりか、極めて非友好的な態度で、私たち一人ひとりの身分証をスキャンする部門もありました。資料を受理した部門も、ただ転送すると述べるにとどまり、私たち最下層の牧民の声に真剣に耳を傾ける者は一人もいませんでした。私たちはこのことを深く遺憾に思います。

昨日、四子王旗の指導者が自ら北京に来て、私たちに帰郷するよう説得しました。帰郷後には必ず説明を行うと述べ、その態度も比較的誠実なものでした。

「解鈴還須繫鈴人（問題を解くには、それを生んだ者が解かなければならない）」という言葉があります。北京では誰からも重視されない以上、私たちは故郷に戻り、引き続き権利擁護を行うほかありません。よって、本日、私たちは北京を離れ、帰郷することをここに声明します。

この場を借りて、十数日間にわたり、世界各地のモンゴル民族同胞がインターネット上で示してくださいました積極的な支援に心から感謝申し上げます。また、各民族・各界の良識ある方々からの誠実な支援にも感謝いたします。さらに、国内外メディアの迅速な関与にも深く感謝いたします。

陳情と権利擁護の道は、私たちにとってすでに5年にわたる険しい道のりでした。私たちは今後も法に基づき権利擁護を続け、政府が私たちに公正を返すその日まで、歩みを止め

ることはありません。

敬具

四子王旗
陳情・権利擁護を行う牧民一同

2015年1月24日